



長倉三郎先生を偲んで

Tadayoshi SAKATA 坂田忠良 長光会, 東京工業大学名誉教授

筆者が東京大学理学部化学科を卒業したのは52年前である。その頃、同窓生の間では大学院進学に当たっては、理学部化学科の講座よりも外部の大学院に進学しようという機運が高かった。理学部化学科の伝統的な化学よりも外部の大学院で新しい学問(化学)を学びたいという機運が高かったからだと思われる。

筆者たちは当時長倉先生が主任教授だった物性研究所の「分子」部門に興味を持ち、六本木にあった物性研究所の長倉先生を訪ね「分子」部門での研究を伺った。当時長倉先生は歯の治療をしておられたようで、前歯が欠けた口を動かして熱心に研究室の紹介をして、筆者らを歓迎して下さったのが何となくユーモラスで好印象を持った。結局その年は長倉研には4名もの大学院生の進学が決まった。

当時、研究室の助手は田仲二郎さん(名古屋大学名誉教授)、吉原経太郎さん(分子科学研究所名誉教授)、先輩には細矢治夫さん(お茶の水女子大学名誉教授)、茅幸二さん(第5代分子研所長)、岩田末廣さん(分子科学研究所名誉教授)、など^{そうそう}錚々たる人材が集まり活気に満ちた雰囲気であった。

長倉先生はシカゴ大学のR. Mulliken先生(1966年ノーベル賞受賞)の研究室にも滞在され分子の電子構造において新分野を開拓された気鋭の研究者として知られていた。

しかし、良い意味で、明治から続く日本の伝統的雰囲気も残された方で、謹厳で少し怖いところもあった。門下の小生や茅さん(茅幸二第5代分子研所長)などは長倉先生にはよく叱られたほうである。しかし、先生は叱った後何かと優しい言葉をかけて弟子たちが委縮しないように配慮をされた。筆者は大学院生時代N-エチルフェナジルという中性ラジカルの合成をしたことがあった。

しかし、途中で合成に失敗して高価な試薬を無駄にした。そのことを先生に報告すると「また試薬を買って実験を続けて下さい」と言われた。筆者は何か厳し

い言葉が出るものと内心緊張していたのでこの優しさには救われた思いだった。

また先生は弟子たちの就職についても熱心で、配慮を欠かさない優しい思いやりを持った人だった。

先生は分子研所長を辞めても頭髪は黒々として健康そのもので不老長寿の人に見えた。

しかし、80代後半くらいから黒々としていた頭髪は急に白くなり老化が進んだようである。

先生の知的好奇心は老いても旺盛で、「科学の起源」や「多面的なものの観方」に興味を持たれ、著書『「複眼的思考」ノススメ』を残された。

筆者はこのまま百寿者になれば「老年的超越(Gero-transcendence)」に至り、「遊戯三昧」の「悟りの境地」を筆者らの前に示されるものと心から期待していた。

しかし、惜しむらくは満100歳を目前にして99歳で亡くなられた。在りし日の先生の温容を偲びつつ、ご冥福をお祈りいたします。

© 2021 The Chemical Society of Japan



長倉先生写真館



1967年4月(提供:林久治)